

雪深馬芻難得、所以雪消草生、方始發遣。同月十一日將軍東人廻至多賀柵自導新開通道。總一百六十里。或冠石伐樹、或墳潤疏峯、從賀美郡至出羽國最上郡玉野八十里、雖總是山野形勢險阻、而人馬往還無大艱難。從玉野至賊地比羅保許山八十里、地勢平坦無有危峻、狄俘等曰、從比羅保許山至雄勝村五十餘里、其間平、唯有兩河、每至水漲并用船渡。

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年二月庚辰、是日始開恭仁京東北道、通近江國甲賀郡。

〔日本紀略桓武〕延曆廿一年五月甲戌、廢相模國足柄路開管荷途、以富士燒碎石塞道也。廿二年五月丁巳、廢相模國管荷路、復足柄舊路。

〔松の落葉〕管根路

萬葉集の歌に、足柄乃管根飛起行鶴乃乏見者、日本之所念とよみたるをおもへば、はこねもあしがらにてはあれども、その足柄のうちに、ことに足柄といひし山ありて、管根とはことにいへり、そは日本後紀延曆二十一年のところに、廢相模國足柄路開管荷途○略中と見え、同二十二年のところには、廢相模國管荷路、復足柄舊路とみえたるにても、玄られたり、管荷路といふは、足柄路と同じくにのうちにて、ともに東にゆく道なれば、今之管根路なるべし、いにしへははこねとも、はこにともいひたりけん、詞玄たしくかよへり、此路延曆のころひらかれてよりのちは、ちかくてたよりよきま、に、廢管荷路とはあれども、なほたえずして、やうやくに人のゆき、おほくなれるさまなり、はこね路をわがこえくればいづのうみや沖の小島になみのよる見ゆ、と鎌倉のおとゞのよみたまひたれば、これも大路なりけり、又阿佛のいざよひの記に、二十八日、伊豆のこふをいで、はこねぢにかかる云々、あしがら山はみち遠しとて、はこねぢにはかかるなりけりといへるを見れば、足柄路はとほくて、たよりあしければ、はこね路にかかるにて、かなたはゆき、のすくくなりて、つひにみちたえぬべきさま見えたり、されど